
速度と速さが落ちる時

白代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

速度と速さが落ちる時

【Zコード】

N4020K

【作者名】

白代

【あらすじ】

人の体内には、速度が川のように流れている。

『センパイ』はそう言った。ながれも自分の速さを知りたくて、落ちた。速度を知りたかった人間を調べようと、無関係者が関係者になる。

0／落とした速度(前書き)

かのうそこ暗い話だよー。

〇／落とした速度

【じやつ雑談】

しかばね…うちの町でさ、自殺した奴がでたみたいで。軽く新聞に載つてたよ。

真弓：へえ。しかばねさんはどこに住んでる人だつけ？
しかばね…東京の田舎の方。まあ、池袋とかにすぐ行けるつちやあ行けるけど。でさあ、その自殺者のことだけ。なんか、まだ若い女の子だつたらしいね。ほんとなんといふか馬鹿といふか。変な遺書も残してたらしいし。

真弓：そなんですか……ていつか、自殺志願者でもないのにこのチャットに居るわたしたちつてｗｗｗ
しかばね：いいんぢやない、まあ。

真弓：じゃあ、ちょっとそのことについて調べてみますね。落ちます。なんだか興味があるといふか。

しかばね：なにに？

真弓：死んだ女子に、ですかねえー。

【板日新聞】

東京都江戸川区にて、灯川高等学校の女子生徒が自殺した。尚、女子生徒は自殺するような少女だとは一切語られず、朗らかな少女だつたと証言される。本人が残した遺書だと思われるワープロ書きの本文には意味不明なことが残されてあつた。学校側は女子生徒の死を酷く嘆いており、『教師などへの態度もよかつた』『とても成績優秀な子だつた』と語つている。

（以下略）

「ながれちゃんに、これを渡してくれ。あと、伝えてほしいことがあるんだ。絶対に忘れるなよ、これは、僕の速度に関わることなんだ。……ながれちゃんに、『僕は速度を計りました。速度研究部の活動頑張ってください』って。あと、『これが証拠です』って、この封筒を渡してくれ。いいか、中身は絶対見るなよ。中身を見ているのは彼女だけだ。……ああ、それともうひとつ。これも絶対に言つてほしい。いや、特に言つてほしいかな、」

『あみは、速度を落とした』。

八千代ながれ。

やちよ

という少女を、風見 大気が気にかけていたのは高校に入学しての四月、クラスと班が一緒になつてからで、また、ながれについて『うわさ』がたつっていたのも、その頃だつた。うわさというのは勿論いいものではなく、『おかしい』とかそういう類のものだつた。かといつて彼女に友達がいなかつたりいじめられているということは全くなく、むしろ、女子とも男子とも仲が良さそうに接していた。だが、そんな彼女の中にな何か『深いもの』があつたのかもしれない。

その『深いもの』というのは、黒かつたり、もしくは『彼女ではない何か』だつたりするのかもしれないが。

大気は、彼女の全てを、まだ把握しいれていなかつた。でも彼女と授業中少し話したりするだけで、俺ならもつといろんなことを知つていける、俺は知りたい、そんな気分になつていたのだ。恋愛感情とか、そういうものではないと大気は思う。

そして。

大気は剣道部に入部したものの、9月、自宅の階段から落ちて（とても情けない話なのだが）、腕・手等を怪我してしまつた。骨折とまではいかなかつたものの医者からは『もう自由に剣道ができるないだろ』と宣告され、大気は大好きだつた剣道を止めざるを得ないことになつてしまつたのだ。でもまあ最近面倒だなあと感じていたし、今となつてはもうそんなことふつきれ、退部し、よし自由だと張り切つていたところ、同居する叔父と叔母からなんでもいいからとりあえず他の部に入部しておくようにと言われたのだ。恐らくは、彼の内申などを気にしているのだろう。

仕方なく、大気はどこかの部に入部しておくことにした。

職員室

の棚から部活一覧表を見て、自由で部員数が少ない部活をピックアップしたところ、残つたのは『文芸部』と『オカルト研究部』と『速度研究部』だった。

文芸部には自分の苦手な同学年の女子（根暗で、だれとも話そうとしないようなタイプだ）が三名くらいいたし、オカルト研究部は何より一番怪しげで不安になるような部活だった。確かにこの間は太った三年の男子が、『火の玉を作る』とか言って、怪しげな液体の入ったプラスコを持つて『火の玉ができるー！』と叫びながら、とりつかれたように廊下を走つていたつけ……思いだし、とりあえず文芸部とオカルト研究部はカットした。残つているのは、『速度研究部』。

部員の名前はのつていない。だが、部員数は載つている。部員数、一名。廃部ストレスだ。こんな部活があることすら知らなかつた。

いつたい速度研究部とやらは何をしているのだろう。

とりあえず入部しようと思い、大気は入部届に必要事項をスラスラッと書いて、顧問に提出した。部員に挨拶をするのは後にしようと思つたのだ。

某年9月某日。

大気の速度は、流れていた。

顧問に教えられた部室は、三階にあつた。階段をあがり、トイレが近くにある一番奥の教室。この教室は使われていないものだと顧問は言つた。なんでも、最初は普通にクラス数が多かつたために教室として使われていたが、クラス数が減るにつれ物置にされ、卒業した部員が率先して部室に生まれ変わらせたという。ちなみに、部

の設立者はその卒業した部員だという。今現在は大学生だろう。

大気はその部室前に来ていた。速度研究部の部員というのは把握していなかった。ましてや速度研究部という、名前を聞いても活動内容がわからないような部の存在すらも知らなかつたわけだし。

明るいタイプの俺（自分で言つてしまつ）には暗いタイプは釣り合わないと思つていてる大気は、もし部員が暗い奴だったらどうしようと考へていた。でももう入部届を出してしまつたし、部員の姿を見て「退部します」と部室をでてしまうのもどうかと思つていてるで、余計に大気は悩んだ。困つた。ドアノブを握つてみるもの、手汗で滑る。

俺の青春がかかつてゐる。

外では楽しくして いたいから。

だから、暗くてはいけないのだ。俺の周りに暗いものがあつては、いけないのだ。

大気は思い切つてドアを開けた。

「……あれっ」

今までの葛藤は何だつたのだろう。部室内は閑散かんさんとしている。背丈が高い本棚には本がびつしりうまつていて、それらの本の背表紙には『わかりやすい速度』『図解！ 速度のヒミツ』『速度がわかる！』など。長いテーブルにはポットがあり、傍らに置かれたティーカップには、それに不似合ひな緑茶が注がれていて、まだ湯気がでていた。更に隣にはノートとペンケースが置いてあり、シャーペンが一つノートの上に置いてある。

明らか、人がここにいたのだ。

「失礼しまーす」部室に足を踏み出す。目についたのは、ノートだった。

ノートの表紙には、

「夢日記……？」

悪いとはわかつていながらも氣になつてしまい、ついつい中を見よつてしまつ。

『夢日記』のタイトル文字は、随分と雑に筆ペンでかかれていた。自分も小学生の頃、日記をつけたが三日で終わつたなあ、と大気は苦笑する。

夢日記のページを開こうとすると、鼻歌が聞こえてきた。誰か来た、と思い大氣は焦る。夢日記はまだ手にしていた。鼻歌はどんどん近づいてくる。やたらと「機嫌な鼻歌だつた。鼻歌が近づいてきて、そして、

ドアが、かちゅり、と控えめな音をたてて開いた。

入ってきた自分を見て、大氣は声をあげる。

「やち、つ……」

「ぎやあああああああああなな何、なになになにながれのそ
の夢ゆめゆゆゆ夢、」

焦りながら少女は大氣に向かつて飛ぶ。ジャンプした。膝より少し下の位置までのびる、学校の指定長さの黒いスカートがぶわりと舞い上がり、黒い蝶を連想させる。パンツみえるぞ、と忠告する間もあたえないままに、少女は大氣にのしかつた。体重は感じられないと言つていいほど軽い。大氣は倒れ、少女は大氣の上におおいかぶさんようにのつっていた。

ふくよかとは言いがたい一つのものが大氣の胸にあたり、大氣は生睡を飲む。少女はそんなことおかまいなしに大氣が手にしていた夢日記を激しく大袈裟な身振りで奪いとり、もう一度大氣に奪われないように抱くようにして、すくつと立ち上がつた。

顔を真っ赤に染めて、大氣を見下ろす。そして怪訝な声で、

「……見た？」

とだけ言つ。

なんだかおかしくかんじて、大氣は笑いながら言つた。

「見てないよ」優しく笑つ。「八千代」

「」の少女こそが、八千代ながれだった。

長くはないツインテールは、一本とも胸のあたりまでのびている。どことなく幼い子供を連想させるような髪型だった。スカートからのぞける脚や足首はとてほ細く、同様に腕もかなり細い。肌の色は白かったが、どことなく健康的に感じさせる。夢日記を大事そうに抱えて、ながれは椅子に座つて落ち着こうと緑茶を口にした。大気も立ち上がり、勝手にながれの対面するような位置にある椅子に座り、ながれを見つめた。

「まさか、部員がおまえだつたとはな。これから苦労しそうだぜ」正直、部員がながれで「超ラツキー！」とさえ思つていた。彼女の胸があたつた時は「超超超ラツキー！」とも思つていた。

「で、どうしたの、急に。なんか機嫌よそうだねえ」

ながれはもう落ち着いていた。いつものように微笑みをこぼしながらふわふわと喋る。

部員がお前だつたから機嫌がいいんだ、とは言えず、「ちょっとな」とごまかして再度口を開く。

「入部しにきた」

「ふーん、…………ふ、一『入部』ふふふ！？ ぶふつ！」

「うわつ、吹き出すなよきたねえな！」

「…………失礼、続けて」

「ああ。俺が足怪我したのは知つてるだろ？ それで、この神たる俺がもう永遠にサッカーできないらしい。この俺がな。どう思う？ これは、屈辱的だ。この俺がサッカー部に君臨することはできなくなるときいて、サッカー部の部員たちはどれだけ嘆いたか」「わーすー」ーい。で？

「で、退部した。でも部活に入ったほうがいいつーことになつて、ここに」

「他をあたつたほうがいいよお」呆れながらながれは言つ。「だつ

て、うち、真剣に部活やつてないもん。いつもわたしが一人でお茶飲んだり一人でオセロやつたりしてるだけだもんっ。だから、風見みたいに『部活しようぜー』って張り切りそうな人にはむいてないよお？ 部活らしき部活をしたことは、あんまりやってないし。まあうちの部活のいいところがそこだけね……お茶飲んだりお菓子食べたりできるから、いいんだけど

「一人でオセロつてどうにうことだ。……そんなにお気楽なのかよ。だったら例えば、その田出た課題を部室でやるってのも可能だつたりするか？」

「うん。ながれはそうしてるもの」

「俺、そういうことができる部活がいいなーって思つてたんだ」「やだよ、風見がうちの部活に入るなんてさー。つむぐくなるもん。どうせながれのこと、またいじめるでしょ」

「いじめないよ」

「え、そう？」

「『いじめる』なんて簡単な言葉では表現できないくらい、いじめつくしてやるよ」

「うだー！」

叫ぶながれを見て笑いながら、大氣は食器棚からカップを出して、自分の緑茶を用意した。9月。8月が終わつたばかりのこの時期なのに暖房がついていて、少しどいうかなり暑い気がしていた。今日は確かに気温が下がつていたが、暖房をつける程ではないだろう。ながれは寒がりなのだろうか。

緑茶をのみ、はあーと息をはいてから大氣は同じく緑茶を飲むながれを見た。

決して美少女というわけではない。容姿は普通だ。

でも、大氣はそんなんがれにもどこか可愛さがあると思つていた。

「とにかく」カップを置いて、ながれが言つ。「入部はやめなよ」

「残念でした。もう入部届提出したぞ」

「はあ！？ なんで！ いつ！」

「今日。正式に俺は部員だ。あー後ちなみになんで入部したかって
いつと、楽そうだったから。それ以外に理由無し。部員がお前だつ
て知つてれば入部しなかつたけどな」

「退部しろ!」

「無理。ここ以外に楽そつな部ねえもん」

「もーいやあー」

嘆くながれを見ながら笑い、大気は緑茶を飲んで一息ついた。
そして口を開き、話題を切り出す。

「ここって何をする部活なんだ？ 活動日はいつだ？ 詳しく教え
てくれよ、俺塾行つたり遊んだり忙しいんだから」

「んーと、活動日は毎日でー、じゃあ、ながれが休んだ日は無しに
しようか」

「なんだよそれ……」

ながれは笑つて、部活の説明をしていく。

「『』の部活はね、速さ……『速度』を研究し、そして『速度を感じ
る』部活。実際に速度を計つたりすることは多分無いけれど、そつ、
速度を『感じる』んだね、主に。

ながれたちは、『』して毎日生きている。人間には同じ時間が対
等に与えられ、そしてながれたちの体に速度は『流れている』んだ
よ。血液と同じように。でも、もう卒業しちゃつたけどこの部活に
いた人に会いについて、速度について教えてくださいって言つたん
だ。そしたらね、『センパイ』は、時間は人間に公平だ。けども、
速度は公平じゃない。人間は、自分の速度を計つたりすることはで
きないけども、必ずしも人間に速さというものはある。生きている
中で、その速度が遅い者、早い者、かなり遅い者、かなり早い者。
そしてそして遅かったのに早くなる者……まちまちである、って。
ながれは、お風呂に入っている時に考えてたんだよねー。多分その
センパイの『』ことつて、速さつて、人間の日常の速さのことじゅ

ないかなつてね。センパイの通う大学の近くに行つて、センパイにそれを話そうとした。ながれの考えたこととか。また、センパイの話をきけたらいいなつて。

でも、センパイはいなかつた。センパイの友達がながれに、センパイからお手紙だよつて、お手紙を渡してくれた。大きい封筒に入つてたんだけどね。手紙には『速さを計りました。これが証拠です。ながれちゃん、速度研究部の活動、頑張つてください』。つて。こう書いてあつた。大きい封筒の中には、画面のプラスチックが割れたトップウォッチが入つてたんだけど……壊れてて、時間は表示されてなかつた。

センパイのそれは、よく意味がわからなかつた。だけど、ながれは、速度についてわかつた氣がするんだ。速度研究部の言う速度は、要するにそういうことなんだよ。あつ、トップウォッチはハンガーにかかってるよー

ハンガーにかかつたトップウォッチの画面は、確かに割れていた。

なぜ割れているのかは、ながれにもわからないといつ。

「……で。風見が本当に入部したいなら、ながれの話を最後まで聞くことだね」

「話？ 話は今ので終わりだろ」

「終わりじゃないよ」満足げにながれが言う。『まあ、全く関係の無い話だけど』

緑茶は冷めかけていた。

ながれは他の生徒よりとりわけ頭が良い。学校の勉強もできるはできるが、彼女のやつている勉強はそんな甘つちよろいものではない。時にはフランス語や、高校生が覚えなくてもいいような科学のこと、世界のこと、なんでも知つていて。ながれの話をききにこようとしたこの部室に足を運んだ三年生が何人かいるほどだ。

「さて。今回は、『木の実で爆弾製造ができるか』についてお話し
ましよう」

それをきいて、大氣は溜息をつく。呆れた。本当に内部とは何も関係のない話だつた。ただコイツが話たいだけじゃないか、と思ひながら緑茶を飲む。ながれは得意げだつた。

「木の実で爆弾製造、ねえ。本当に関係ねえなあ」

「バッキンガムシャー北部のナッシュ村のとある学校の田誌を読むと、1917年の11月19日、このような記述がある。『トチの実を集め、弾薬用として提供したことに対し、火薬調達官から感謝状が届く』、と。まさか木の実の鉄砲だと思う？ まさか。トチの実はどう使われたのか。弾薬とどう結びつくのかねえ。

イギリス科学界発行の月刊誌の1987年2月号に掲載されているのは、トチの実は第一次世界大戦中、アセトンの製造に使われた、つてある。アセトンってのはね、煙のでない火薬のコルダイトの製造に使われるやつだよ。コルダイトは線火薬65%、ニトログリセリン30%、ワセリン5%からなるんだね。アセトンでゼラチン状にして実際に使われる形に加工するんだ。アセトンは木の抽出で、

「ちょっと待て」

「ん？」

「結局、八千代は何が言いたいんだ？」

大氣の発言をきいた途端、ながれは豪快に笑い出す。腹をおさえて涙を目に浮かべながら、さもおかしそうに笑い転げた。大氣が唖然としていると、「ごめんごめん」と涙を吹いて冷静になる。だがまだニヤケていた。

「部長、八千代ながれが言わせてもらつ。きみ最高！ あはははは！」

「結論をききたいんだけど。それにしても何がおかしいんだか」

「ああ、結論ね」立ち上がり、本棚から何やら本を取り出しながらながれは言つた。「木の実で爆弾がつくれる、木の実の成分から君でも簡単に爆弾を作れたら、どうする？」

「えつ？」

大氣はしばらく考え込んだ。これは、入部試験とかそういうものの

だろうか。答えによつて、ながれが自分を入部させるかどうか決め
るのだろうか。「うーん」と唸りながら考え込んだあげく、何か閃
いたように大気は笑顔になつて、ながれに言つた。

「学校を、破壊する！」

「入部してよし！」

どうやらながれはその答えを待つていたらしい。このように答え
ていなかつたら、ながれは無理矢理にでも大気を退部させただろう。
八千代のことだからこう答えればいいだろ、と大気は思つたのだ。
ながれは微笑んで、先程取り出した本を大気に差しだした。

もうすぐ、部活動中の生徒が帰宅する時間だ。それでも吹奏楽の
トランペッタの音がきこえてくる。

「なんだよ」

「これ、風見に貸すよ。割と新しい本だし、読みやすいと思つよ。
君はまあながれと比べたら馬鹿だけど、頭いいほうだからわかるん
じやないかな。この本に、今の話の答えや続きがのつてゐる。興味が
あつたら、読んでみて」

と、無理矢理大気に本をおしつける。

本のタイトルは『超科学講座』。薄くも厚くもない厚さで、確かに
新しいものだつた。ただタイトルからして難しそうで不安だつた
が。

「今日の部活は終わり。また明日、本返すのは、いつでもよし
帰りの用意をし終えて、ながれが言つた。

「解散！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4020k/>

速度と速さが落ちる時

2010年10月27日21時37分発行